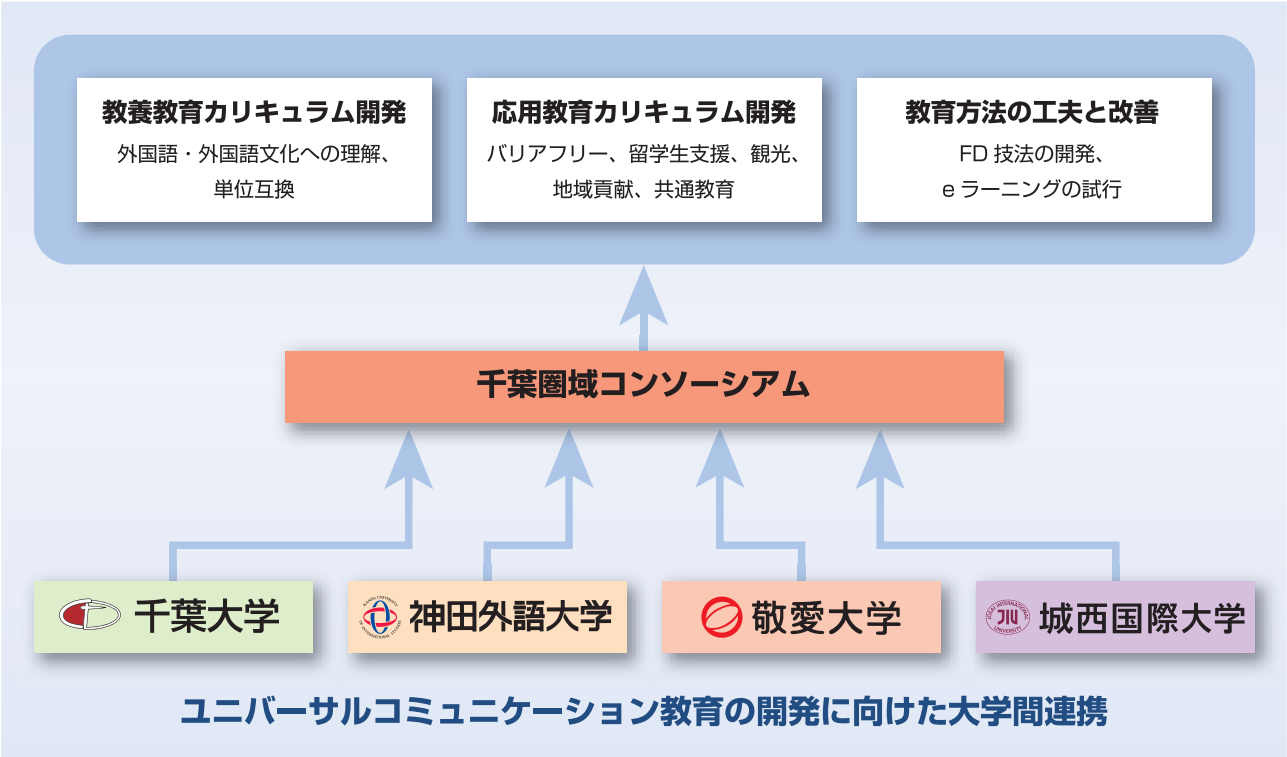
戦略的大学連携支援事業
ユニバーサルコミュニケーションのための教養教育に向けた千葉圏域コンソーシアム

2008年に採択されました戦略的大学連携支援事業「ユニバーサルコミュニケーションに向けた教養教育のための千葉圏域コンソーシアム」も早2年目半ばを過ぎ、折り返しの時期を迎えました。この間、本コンソーシアムでは、ユニバーサルコミュニケーション教養教育の実現のために、「教養教育カリキュラム開発」、「応用教育カリキュラム開発」、「教育の工夫と改善」を3本の柱として教養教育の改善に努めてまいりました。今号ではこれまでの取り組み成果の一部をご紹介します。



本取組では、国際化と社会変容が進む千葉圏域において、千葉大学を中核に4大学を結集して「千葉圏域コンソーシアム」を構築し、ユニバーサルコミュニケーションの実現に向けて、FD実践に裏付けられた体系的な教養教育のカリキュラムを開発するため、千葉圏域コンソーシアム運営協議会のもとに「ユニバーサルコミュニケーション教養教育プログラム開発部会」、「ユニバーサルコミュニケーション応用教育プログラム検討部会」、「コンソーシアムFD部会」を設け、これらの部会においてユニバーサルコミュニケーション発想を基礎に据えたカリキュラム、コンテンツを開発しています。とくに、国際文化理解のための教育コンテンツ、手話教育の試行、授業方法の検討を主要な課題に据えるとともに、実効ある教養教育実施のためのFDについて集中的に検討を行っています。また、eラーニングを試験的に導入するとともに、ICTを利用したFDの方法についても検討しています。

教養教育カリキュラム開発

4大学における単位互換協定の締結

2009年3月30日、千葉大学において、千葉大学と神田外語大学、千葉大学と敬愛大学及び千葉大学と城西国際大学との単位互換に関する協定調印式が、執り行われました。

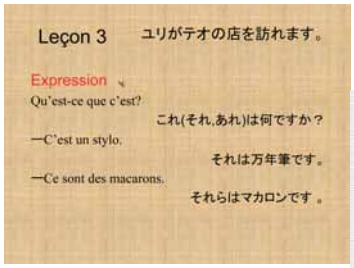
これに伴い、2009年度後期より、4大学間での単位互換授業が開講され、各大学の持つ特色豊かな授業を連携校間で互いに受講できるようになりました。

コンソーシアム単位互換協定協定調印式の様子
（左から）赤澤正人学長（神田外語大学）、土井修学長（敬愛大学）、齋藤康学長（千葉大学）、水田宗子学長（城西国際大学）。

外国語教育に関するｅラーニングコンテンツの開発（神田外語大学）

支援プログラム事業の平成21年度実施目標のひとつである「eラーニングシステム構築と試験的運用」を目指して、神田外語大学では外国語教育のｅラーニングコンテンツ開発に着手しました。

これまで神田外語大学では、外国語教育の充実を図るため、さまざまな語学教育に取り組んできました。とりわけ英語教育に関しては、既存のオンライン教材を利用するのみならず、English Language Institute において開発したｅラーニングコンテンツを授業で使用しており、英語学習に高い効果を上げています。一方で、留学生に対する日本語教育も忘れることができません。留学生が大学における学習を滞りなく進めることに加え、日本での日常生活を円滑に行うためには、留学生に対する日本語教育が重要となります。そのため、留学生別科において留学生を対象とした日本語教育のための ｅ ラーニングコンテンツを開発中です。このような現状をふまえた上で、改めて ｅ ラーニングに関する調査・検証を実施し、日英語以外の外国語教育を促進するための語学教材開発が急務であるとの認識を得ました。



現在、神田外語大学では、＜新たに学ぶ外国語と異文化理解へのいざない＞との位置付けで開講されている「トライ・外国語科目」で使用するための ｅ ラーニング教材を開発中です。開発したコンテンツはコンソーシアムに提供されるほか、コンソーシアム単位互換科目「トライ・外国語」で使用される予定です（写真はフランス語を対象としたコンテンツです）。

●トライ・外国語科目

トライ・外国語科目は、言語と文化の合体講座として、音声、文字、語彙、基本フレーズなどの言語のミニマル・エッセンスを学ぶと同時に、言語の背景にある文化に触れることによって、その言語を学ぶ道筋をつけることを目標とする初修外国語科目です。中国語、韓国語、スペイン語、インドネシア語、タイ語、ヴェトナム語、ブラジル・ポルトガル語、フランス語、アラビア語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語が常設されている他、日本では学ぶ機会がごく少ない言語も適宜開講しています。

ｅラーニングコンテンツの開発（敬愛大学）

敬愛大学では、主に留学生への日本語教育を目的とした「1年基礎演習」と異文化体験を目的とした海外研修プログラム「海外スクーリング（海外研修）」に関するｅラーニングコンテンツを作成しています。

●1年基礎演習

敬愛大学における1年次基礎演習は、大学生としての基本的なキャンパススキルの習得、および、ゼミ生のコミュニケーション力の育成、2年次以降の専門教育に対する基礎学力の習得を目的としています。特に国際学部はその名の示すとおり、国際協力と幅広く国際化に対応できる人材育成を目標としており、そのためアジアを中心とした留学生も数多く学んでいます。しかし、留学生の一部には十分に日本語に習熟していない学生もおり、そのため、日本語・国語基礎教育も多くの教員にとって授業に取り入れたいコンテンツとなっています。

コンテンツ化を行うにあたっては、フォーラム等によるコミュニケーションエリアを提供し、多国籍の学生が共に学んでいる敬愛大学の特色を活かして、より幅広い学生間のつながりが構築できるよう工夫しました。また、教材をモジュール化し、担当教員が必要な部分を選択して自身の授業に活用できるよう、教材の再利用による効率化も考慮しています。

●海外スクーリング

敬愛大学の海外研修は、「海外スクーリング」と呼ばれ、地域研究を中心とする教員が、自分のフィールドワークに学生とともに学びに行くといった充実した異文化体験型の海外研修プログラムとなっています。本研修は、開発途上国を中心とした諸外国での貴重な体験学習の場を学生に提供するものであり、加えて単位認定も受けられる敬愛大学独自の海外研修プログラムです。

この海外スクーリングにおいて、eラーニングによる渡航前後の事前・事後学習を行うことで、より深いところでの異文化理解へ向けた支援を行います。渡航前の事前学習では、海外情勢に興味関心を持ち、さらに情報収集を行うことで得られる異文化に対する知識の習得と現地での生活・活動のノウ・ハウを ｅ ラーニングを利用して学習します。また、研修後にも、研修で得た知識と体験をより内面化し、より深い事後学習が行われるよう、ｅラーニングの持つ特性を活用した教材の開発に取り組んでいます。教材開発では、服装や料理といった表層レベルの相違だけではなく、文化的社会的な価値観やコミュニケーションの深層部分においても「気づき」が行われ、国際社会や異文化コミュニケーションにおいて深く有意味な学習となるように配慮しています。

多言語コミュニケーションセンターにおける外国語学習教材の活用（神田外語大学）

神田外語大学多言語コミュニケーションセンター（以下、MULC）では、学生の外国語学習、および、文化理解のための教材を数多く所蔵、提供しています。そのなかには日本国内では入手できないものも多数含まれています。MULC の 7 つの言語ブース（中国語、韓国語、スペイン語、タイ語、ベトナム語、インドネシア語、ブラジル･ポルトガル語）にはそれぞれの言語の教材を配置し、さらに、インターナショナルエリアにはアラビア語・フランス語など 6 つの言語の教材を所蔵しています。

教材は、書籍・ジャーナルなど活字媒体によるものだけでなく、CD・DVD などの音声・映像教材、CD-ROM などコンピュータを用いた語学教材など、多岐に渡っています。学生はこれらの教材を頻繁に利用しており、書籍・ジャーナル等の活字教材のうち、語学教材は授業の補完や自習などに活用されています。文化理解の教材は、学生自身が興味・関心に応じてさまざまに利用しています。

その際、語学担当教員と留学生が学生の利用を促進するためサポート体制もとっています。一方、音声・映像教材は、学生が自らの興味で視聴するだけでなく、教員も授業でしばしば利用しています。

これらの教材は、別途開発中の外国語教育 e ラーニングコンテンツのための参考事例としても役立っています。

■MULC 所蔵教材の内訳（平成 21 年 9 月 17 日時点）

・所蔵教材総数：3782 点

内連携事業補助金対象分：1493 点（書籍：941 点、ジャーナル等：24 点、CD（-ROM）／ DVD ／ VCD 等：528 点）

外国語授業改善のための視聴覚教材活用の取り組み（千葉大学）

1. 携帯語学端末（iPod）を活用した語学教育充実化の試行（ドイツ語、中国語）

（1）ドイツ語

授業科目：ドイツ語 3a（ドイツ語初級会話授業）

参加人数：12 名

実践期間：1 ヶ月半（6 月中旬～7 月末）

＜授業概要＞

iPod を用いた実際のドイツ語の聞き取り練習を通じて、聞き取り能力の向上、発音能力の向上に生かす。また、ドイツ語の映画やニュース番組等を全員で視聴することにより、ドイツ語文化圏情報の教育にも応用する。

その際、内容の把握はともかく、できるだけ多くのドイツ語を聞くこと（多聴）と、内容をある程度限定し、文構造などの理解も含めた詳細な内容の聞き取り（精聴）の両面からの練習を行う。

主に、ドイツ語圏での (1) 様々な場面での会話、(2) 音楽、(3) 子供教育番組のビデオ、(4) ニュース、(5) 映画 を教材として利用した。

＜試行を終えて＞

教材の選択、実際の授業で iPod 教材との連動、著作権の問題など多くの課題が見えてきたが、当初の目的である「ドイツ語に触れる」ということに関しては、十分に効果があったように思われる。参加者の多くにとって、iPod が運ぶ「ドイツ語の今を写す生の教材」は新しく新鮮なものであり、語学、とりわけ会話学習で乗り越えるべき第一の関門である「その言語の音に慣れる」という課題を無理なく乗り越えることができたと思われる。

＜学生の感想＞

・電車などで気軽にドイツ語を聴くことができたのでよかった。歌だけでなく、映画やニュースなど、様々なものが楽しめた。

（2）中国語

授業科目：中国語 5

参加人数：8 名

実践期間：2 か月（6 月上旬～7 月末）

＜授業概要＞

「Web で中国語」というのがこの授業の副題である。現代中国についてより深く知るために、特定のトピックを選定し、これに関する文字情報、音声情報、映像情報を統合的に扱うことを目指した。音声情報の予習復習に iPod を活用した。

主に、インターネット上で公開されている Podcast から、中国における日常生活の一コマ、歴史と伝統文化の紹介などを教材として利用した。

＜試行を終えて＞

授業時においては無線 LAN に繋がっているノートパソコンを使用、学生が随時 Web 上に存在する中国語学習用の資源を参照できるようにするとともに、扱うトピックに関連した映像資料の提示とを併用するように努めた。また、在宅学習のためには、Moodle による予習教材の提示と iPod による反復的な聞き取り練習とを組み合わせた。すなわち、五感すべてを動員して中国社会の「いま」に触れさせようという欲張った授業を計画した。Web 上の検索システムで中国語を入力して関連する文献等を探し出すことなど―つまり文字を読むこと―にも習熟して欲しかったのだが、事後の学生アンケートによれば、「Moodle による予習教材の提示 ＋ iPod による反復的な聞き取り練習」への評価が圧倒的に高かった。これは一面残念なことだったが、反面聞き取り練習における iPod の学習効果を十分に認識させられる結果となった。

（※次頁へ続く）

＜学生の感想＞

・iPod を使ってのリスニングはとても苦労した。最初は全く聞き取ることができずに落ち込んだものだったが、最後には大体の穴埋めはできるようになったので僅かながらでも成長を感じられた。

・授業時間以外に例えば電車の車内等で、英語以外の外国語に触れることが出来たのはとても新鮮でした。…外国語はその国の「今」を学ぶことが大切だと思います。その点、こうしたリスニングが何時でも何処でも可能だったというのはよい刺激になりました。iPod …ぜひ、今後とも授業での使用を続けて下さい。

2. 外国語学習のための動機付け動画教材の開発（中国語）

毎年新入生の三分の一を占める約 800 人の中国語履修者がいるなか、(1) いかに学習者のモチベーションを高めるか、(2) 50 人以上のクラスでいかに会話の練習を行うか、が課題となっている。

現在、(2) に対する取り組みとして、文法事項や会話の話題を作成した PowerPoint 教材を試行している。これにより、従来の板書する時間を会話練習の時間にあてることができるようになってきた。また、PowerPoint 教材の利用による授業の効率化は、学生の集中力向上に一役買っており、その結果として積極的に会話練習に取り組むという効果も見えつつある。このことは語学授業への ICT 教材の導入が有効であることを示す一例といえる。

このことを踏まえ、(1) に対する改善策として、動画や写真を用いての中国文化の紹介を含む視聴覚教材を作成、および、その試用を通じて中国語学習の興味を喚起させ、さらなる中国語能力の向上を試みたい。

今年度は以下のような視聴覚資料の作成および授業への試用を通して、学習者に中国語学習の興味を喚起させることで、さらなる中国語能力の充実を試みたいと考えている。

現在予定している視聴覚教材は以下のとおりである。

1. 千葉大で中国語を履修した卒業生・中国人留学生・千葉大のそのほかの地域から来た外国人留学生にインタビューし（日本社会での中国語活用の実態、中国から日本に留学に来た目的、世界から見た中国語学習の意味など）、視聴覚教材とする。作成した視聴覚教材を活用し、語学学習についてのアドバイスや現在の中国の社会意識や社会文化の紹介を行うことで、初めて中国語を学習する学生の興味を喚起する。
2. 毎年行っている海外語学研究を経験した先輩にもインタビューし、習得した語学を現地で実際に使うことの楽しさと大切さを実感してもらう。
3. 中国の街角の風景を撮影後、テーマごとに 1 編 10 分程度の視聴覚教材を作成する。中国理解と語学学習を促す目的として、次のようなテーマを考えている。
   - 上海の交通手段
   - 現代中国の若者の結婚式、結婚意識調査
   - 大学生の学習、生活、就職活動について
   - 公園の風景（太極拳、武術、将棋、歌、ダンスなど）
   - 小学校低学年生徒へのピンインや漢字の教え方について
   - 「教師の日」
   - 衣食住（衣）街角の風景（若者のファッションなど）
   - 衣食住（食）市場の状況と屋台
   - 衣食住（住）住宅状況（高層ビルと里弄、市民の住宅）

現在までに、千葉大学に在籍する留学生へのインタビュー撮影、および、上海における街角の風景の撮影を完了している。

応用教育カリキュラム開発

新規授業「バリアフリー・コミュニケーション入門」の開講（千葉大学）

2010 年秋の「ゆめ半島千葉国体」に合わせて開催される「ゆめ半島千葉大会：第 10 回全国障害者スポーツ大会（10/23～10/25）」に際し、千葉県から障がい者選手に対するボランティア学生の派遣（千葉大学から約 200 名）を要請されており、地域機関大学として協力が望まれています。このことを背景として、学生にボランティアへの意識、意欲を高めてもらうため、全面的に千葉県の協力を得てこの授業は企画されました。

この授業の直接的な目的は、2010 年 10 月に千葉県で開催される「ゆめ半島千葉大会：第 10 回障害者スポーツ大会（10/23～25）」に参加する選手たちの支援ボランティアを養成することです。しかしより広くは、障がいをもつ人たちへの偏見や差別意識をなくし、ともに手を携えて同じ場所に生活することの深い意味や、すべての人が参加し、平等の情報を得ること（情報保障）の意味について考えていきます。障がいを持つ人たちとの日常的な接し方から、バリアフリー・コミュニケーションの手段として、ごく初歩的な手話や筆記を勉強します。

この授業の大きな目標は、障がいを持つ人たちへの偏見や差別意識をなくし、親しく接することができるようになることです。そのために、まず障がいを持つ人たちの立場に立って考えることから始め、簡単な手話や筆記ができようになることをめざします。なによりも障がい者とのコミュニケーションの第一歩を踏み出すことが大切です。

●授業概要

2010 年 10 月に千葉県で開催される「ゆめ半島千葉大会：第 10 回障害者スポーツ大会（10/23～25）」に参加する選手たちの支援ボランティアを養成するために、千葉県から講師を派遣してもらい、障がいがあるとはどのようなことかという理解から始め、バリアフリー・コミュニケーションの手段として簡単な手話や筆記の実技を学びます。

手話への取り組み（城西国際大学）

福祉総合学部の学生を中心として、手話への取り組みを推し進めており、千葉聴覚障害者センターより講師の派遣を受け、手話の技術的指導を受けるとともに聴覚障がいに対する理解とコミュニケーション能力の向上を図っています。また、課外活動での手話勉強会も行われており、

これらの活動を通じて手話に習熟した学生達は、さらなる手話への理解と普及に目を向け始め、その実現の１つの方法として「手話コーラス」に取り組んでいます。

現在、手話コーラスは大学祭やシンポジウム、オープンキャンパス等の機会を通じて発表を行い、日頃手話に触れる機会の少ない方々が手話への理解を得る契機となるよう活動を継続しています。

また、教養教育プログラムに向けたコンテンツ作成を試行しており、ビデオ撮影等のテストも行っています。

教育方法の工夫と改善

コミュニケーション教育の改善と効果測定の取り組み（城西国際大学）

理解度調査、簡易アンケート、小テスト機能を持つ Socratec システムを活用することによって授業改善技法の検討を行っています。この検討は、授業計画 の弾力的な実施と受講者自身による理解度確認の試みを組み合わせることによる、理解度向上のための授業改善技法の開発を主な目的としています。

これまで一部の授業において、第１に同システムにおける授業の進捗に合わせたリアルタイムでの理解度調査機能を活用し、理解度に応じた授業内容の変更、および次回以降の検討の材料とし、授業計画の弾力的な実施を試みてきました。

第２に、同システムは「５択までのアンケート」および「小テスト」としての活用も可能で、正解率の表示もその場で出来ます。受講者も「正解率の低い問題に正解できた」や「正解率の高い問題を間違えた」等の確認が取れるため、授業内で受講者自身による理解度の確認、事後学習の指標作成を行うことができます。

これらの理解度確認における同システムの活用事例は、今後コミュニケーション教育のみならず、資格対策講座等における活用や成績管理などにも応用可能であり、さらなる授業改善技法を開発するための検討材料となります。

さらに教員の FD に関しても、簡易アンケート機能を中心に同システムの活用事例が、効果的な FD 実施方法に有用であるという点を確認しているため、FD 技法開発における活用を検討しています。

学習管理システムを活用した教養教育改善の取り組み

千葉大学普遍教育センターでは、本年度よりオープンソースの学習管理システム「Moodle」を試験的に導入し、次年度からの本格運用を目指していますが、既に本年度前期より多くの先生方にご利用いただいております。

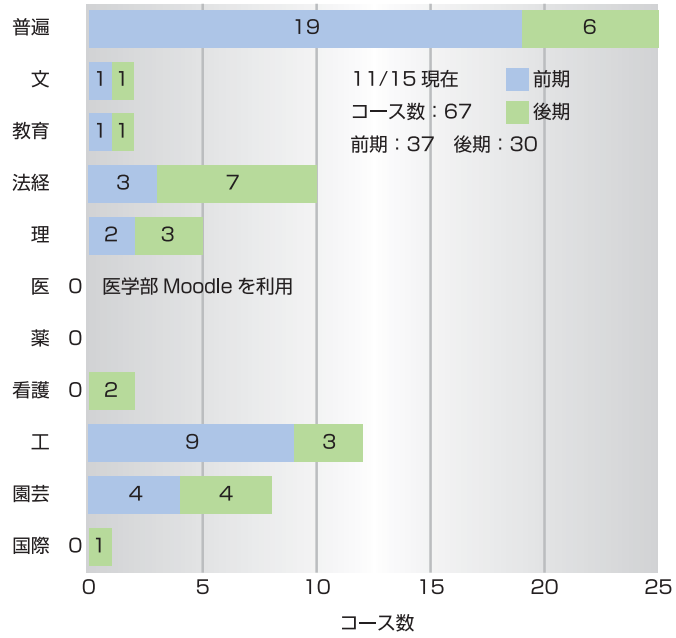
これを受けて前期授業がほぼ終了に近づいた７月28日に、普遍教育センター学習会を開催し、お二人の先生より前期授業における Moodle 利用の実践例をご紹介いただき、「実験を行う上での器具の基本的な取り扱い方法を動画で示し、事前学習を促す」といった利用法や「授業後に小テストを課し、繰り返し学習による知識の定着をはかる」などの利用法が報告されました。

７月の学習会では、こうした実践例とともに、Moodle の利用が受講者から比較的高い評価を受けたことも紹介されました。Moodle によるコース管理のもとでは、小テストやアンケートの実施によって常に授業の進行状況と自身の理解度を確認できること、コース上において授業資料の一覧が可能であるため、授業の振り返りに有効であることなどがその理由です。学生の感想を一部紹介しますと、「授業で使用した資料が Moodle に挙がっていたのが見直し等にとても役立った」、「毎回 moodle での小テストや中間テスト等で知識の定着をはかれることも良かったと思う」、「Moodle の復習問題は公開したままにしてほしい」などの声が聞かれました。

とは言うものの、今まで扱ったことのないソフトウェアを、マニュアル頼みに運用するのは確かにいささか億劫に感じられるかもしれません。そこで９月９日には、Moodle の基本的な運用方法を、実際にノートパソコンを操作しながら習得していただく講習会を行いました。この他にも園芸学部、看護学部、付属図書館、工学部機械工学科などでも講習会を行い、先生方に Moodle をご紹介しています。今後も折に触れてこうした講習会を開催するほか、支援要員の派遣も計画しております。ぜひ多くの先生方に Moodle をご利用いただき、その利点を感じていただきたいと思っております。

なお、各連携校でも同様の講習会が開催されており、毎回 Moodle に興味を持つ多くの先生方が参加されています。また、同様に学生向け講習会も開催し、学生のサポートも行っています。次年度以降には、コンソーシアム単位互換科目について、どの大学からの受講者も Moodle のコースを利用できるようにしたいと考えています。

千葉大学 Moodle 利用状況（学部別）



取り組み成果の発信と点検

千葉圏域コンソーシアム公開市民講座「ちばから考える国際化」の開催

2009年9月27日(日)13：00から16：30まで、千葉大学けやき会館大ホールにおいて、コンソーシアム主催の公開市民講座「ちばから考える国際化」を開講しました。この公開市民講座は、コンソーシアム教養教育部会および応用教育部会におけるこれまでの検討結果を市民に公開するとともに、国際化への対応における地域連携を深めることを目的として行われました。

第1部では、ユニバーサルコミュニケーション、特に異言語・異文化交流促進の基礎として、相互イメージの問題を取り上げ、神田外語大学の花澤聖子氏、敬愛大学の高田洋子氏、城西国際大学のヘルベルト・プルチョウ氏からそれぞれ、中国・東南アジア・ヨーロッパからの日本イメージについて報告があり、千葉大学の山田賢氏によるコメントと参加した市民を交えたディスカッションが行われました。

第2部では、地域と国際社会を結ぶ接点としてのインバウンド観光をテーマに、城西国際大学観光学部の井手口哲生准教授と、千葉県商工労働部の豊島輝雄観光課長による講演が行われました。

一般参加者の感想として「グローバル化が進むなか、今回のような市民講座は更に活発に行われる必要がある。そのような問題に向けて4つの大学が連携していくこと自体に関心を持った」などのアンケートが寄せられ、市民のに活発な討議に向けた問題提起を行うとともに、本連携事業の趣旨に対する関心を喚起できたとうかがわせる反応を得ました。

なお、公開市民講座の様子は
http://cucont.imit.chiba-u.jp/stream/
よりご覧いただけます。

評価諮問会議の開催

2009年3月4日、コンソーシアム参加各大学から1名ずつ有識者を評価諮問委員として推薦して評価諮問会議を実施し、本取組と本年度活動、次年度以降の活動計画について点検を受け、勧告をいただきました。

当会議では、まず平成20年度における取組の成果、平成21年度以降の事業計画について各大学の取り組み担当者から説明があった後、引き続き評価諮問委員による協議と提言が行われました。

●評価諮問委員の紹介

杉森みど里 氏
群馬県立県民健康科学大学学長(評価諮問委員長)

影山美佐子 氏
財団法人ちば国際コンベンションビューロー理事・事務局長

柴宣弘 氏
東京大学大学院総合文化研究科教授

三浦弘 氏
千葉県商工会議所連合会・千葉商工会議所専務理事

これまでの主な活動

■ 2009 年 1 月 23 日
敬愛大学において、第４回運営協議会を開催
評価諮問会議実施体制および公開市民講座の基本方針を決定し、主に次年度事業計画および単位互換について協議しました。

■ 2009 年３月４日
千葉大学において、第 1 回評価諮問会議を開催
平成 20 年度における取組の成果、平成 21 年度以降の事業計画について各大学の取り組み担当者が説明し、続いて評価諮問委員による協議と提言が行われました。

■ 2009 年３月４日
千葉大学において、第５回運営協議会を開催
平成 21 年度取組について協議し、このうち専門部会の設置を決定、また公開市民講座については開催日時・場所を決定しました。

■ 2009 年６月 12 日
千葉大学において、第６回運営協議会を開催
単位互換の実質化に向けた行動計画、公開市民講座のプログラム、およびその他の基本的な平成 21 年度活動方針を決定しました。

■ 2009 年９月 16 日
神田外語大学において、第 7 回運営協議会を開催
FD 共有化のための組織体制構築を決定しました。また、公開市民講座に向けて教養教育・応用教育各部会における成果発信、またホームページ等における取組全体の成果発信について協議しました。

■ 2009 年９月 27 日
千葉大学けやき会館大ホールにて公開市民講座「ちばから考える国際化」を開催
コンソーシアム教養教育部会および応用教育部会におけるこれまでの検討結果を市民に公開するとともに、国際化への対応における地域連携を深めることを目的として行われました。

■ 2009 年 11 月 13 日
城西国際大学において、第 8 回運営協議会を開催
共通授業の設置形態について協議し、その枠組みを決定しました。また、成果発信・進行状況の点検について協議しました。

▶連絡先
普遍教育センター戦略連携室
senryaku-renkei@office.chiba-u.jp
電話・Fax：043-290-3803
千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
千葉大学普遍教育センター戦略連携室